

宝満山のカエルとアロワナ



作・まえだ つとむ

福岡県の太宰府市にある宝満山という山には珍しいカエルがいます。山すそのため池でオタマジャクシから小さなカエルになると、みんないっせいに宝満山の頂上に向かって登り始めるのです。たくさんの子カエルたちがぞくぞくと登り始める姿は有名になり、テレビや新聞で取り上げられるようになりました。

「やっと着いたね」

「しっ、声を出すな」

車から降りてきたたかし君に言うと、おとうさんが人目を避けるように動き出しました。頭につけたライトが、山のふもとのため池を照らしました。さっと水の中に網を入れます。小さなカエルたちが何匹も網の中につかまっています。

「おとうさん、これってどろぼうじゃないよね？」

「カエルは誰のものでもないだろ、何で取って悪いんだ？」

「どうして夜中に取りに来るの？」

「カエルを守る会というのがあって、いろいろうるさいんだ」

「やっぱり、やめようよ」

たかし君が暗闇の中、おとうさんの袖を引っ張ります。

「たかしがでっかい熱帯魚を飼いたいって言ったから、エサにするカエルが必要になったんじゃないか」

そう言われてたかし君が黙ってしまうと、おとうさんは、

「テレビで、この山にエサにぴったり小さなカエルがたくさんいるとわかったからな。さあ、いっぱい取って帰るぞ」

あつという間に、持ってきた入れ物は小さなカエルたちでいっぱいになりました。

「このカエルたちって、みんな山の頂上まで登っていくんだってね」

たかし君はテレビで見た、宝満山のとっぺんに向かってひたすら登り続けるカエルたちの必死な姿を思い浮かべました。

「へんなカエルだよ。途中で力つきたり、へびに食べられたりするのにおまけに頂上にはエサひとつないらしいぞ」

カエルを取り終わったおとうさんは、さっさと山のふもとに向かって降りて行きます。たかし君もあわてて後を追って車まで無事に戻ると、ほっとして頭の上の星空を見上げました。たかし君が宝満山に来たのは、小学三年生の夏に家族で登山して一年ぶりでした。あの時は青空の向こうに街並みがきれいだったなあと思います。

「たかし見ろ、おいしそうに食べてるぞ」

水槽には四十センチくらいの銀色に光る魚が水面近くを泳いでいます。平べったい口でパクリパクリと宝満山から取ってきたカエルを飲み込んでいます。高級熱帯魚のアロワナです。おとうさんはさつそく銀色に光る大きな熱帯魚に食べさせています。

「十センチくらいしかなかったのに、あつという間に四倍くらいの大きさだ。もっと大きくなれば何十万円にもなるらしいぞ。水槽ももっと大きいのが必要だなあ」

成長したアロワナは、今の水槽はきゆうくつなようです。やっと体を反転させながら泳いでいます。水槽のガラスにあたって切手くらいのうろこがポロリと剥がれました。たかし君が浮かない顔をしているので、おとうさんは不満そうです。

「せっかく夜中に捕まえにいったんだから、もう少しよろこんでほしいな」

「ごめんなさい。ねえ、おとうさん、水槽だけど、最後はどれくらいの大きさのものが必要になるの？」

「そうだな、大人になると一メートルくらいになるらしいから、それくらいかな」

おとうさんが両手をいっぱいに広げました。

「今のお家には入らないよ。水槽が一番場所をとってしまうよ。それでも大丈夫なの？」

「たかし、先のことばかり考えないで、今を楽しめ」

言葉に詰まったおとうさんがいつもいう言葉でごまかすと、カエルの入ったバケツのふたを閉めました。バケツの中から、とん、とんとカエルたちがぶつかる小さな音が聞こえてきます。たかし君はカエルたちが、

「宝満山に帰りたいよう」

「頂上までみんなで行こうって約束してたのに」

そう言って泣いているように聞こえました。

赤や緑のライトで照らされた美しい水槽の中のアロワナも、

「食べてごめん。オレも熱帯の河に帰りたいよ。友だちやお母さんたちとも会いたい」

そう言っているように思えました。

その頃、宝満山のカエルを守る会の人たちは、たくさんのカエルが取っつかれていくことに、みんなカンカンになっていました。

「ぜったいに許さんぞ」

「せっかく大切に守ってきたのに、なんてことだ」

「とっつかまえて、こらしめてやる」

これまでいっしょうけんめいカエルたちを見守って保護してきたみんなは、怒りが治まらないようです。そんな様子を見ていた会長さんが、

「皆さんのおかげで、ここのカエルたちのことも有名になりました。宝満山にもたくさん人が来るようになり、地域おこしにもつながっています。そうなるかどうかどうしてもこういふことが起るものです。

まずはこれ以上カエルたちが連れていかれないような運動をしましょう」

の会長さんの呼びかけに、会の中も落ち着きました。

「交代で見張りをしましょう」

「『捕まえないで見守って』というカンバンも立てましょう」

「テレビや新聞で伝えてもらいましょう」

カエルを守る会の話し合いは夜遅くまで続けました。まもなく宝満山のあちこちに看板が立ち、地元の新聞も記事にしてくれました。それでも、カエルを持って帰ることはなくなりませんでした。

「むずかしいものですなあ。でもあきらめないで、がんばりましょう」

見守る会のみんなは困り顔をしながらも、負けないぞという表情で活動をつづけました。

「ねえ、おとうさん。この看板、ぼくたちのことじゃない？」

たかし君はまた、おとうさんと真夜中の宝満山に来ていました。あちこちに立てられた看板を見えます。ますます気が重くなりました。というのも、出発前におとうさんとおかあさんが、大きな水槽に買い替えることや、こうして夜中にカエルと取りに行くことで大けんかの末出てきたからです。

「看板が出ているってことは、他にも捕まえていく人がたくさんいるということさ。気にすることはない。カエルを食べさせてから、アロワナはぐっと大きくなったじゃないか」

「でも・・・もうやめようよ。おかあさんも夜中に取りに行くのは危ないからって心配してたし」

「アロワナが大きくなっていくから、どうしても水そうは要るから、どうやって説得するかあとで作

戦会議をしよう」

おとうさんはそう言いながら、車から網とバケツを引っ張り出します。たかし君はもうすぐにでも帰りたい気持ちでいましたが、しかたなく後ろをついていきました。おとうさんはさっそくため池に網を入れて、バケツの中へカエルたちを押し込んでいました。悲しい気持ちで見えていたたかし君の耳に、

「誰だ、そこで何をしている!」

大きな声が響きました。ライトの光が二つ、三つ、とゆれています。

「守る会の連中だな。たかし、帰るぞ!」

おとうさんがたかし君の手を強く引っ張ると走り出しました。暗やみからの声にたかし君は震え上がりました。

「待て」

後ろから声が追いかけてきます。森の中を走りながら、たかし君は木の枝で顔を打ったり、何度も大きな石や岩につまづきました。強い痛みには耐えながらどうにか車に戻って乗り込むと、おとうさんが大急ぎで車を走らせました。

「びっくりしたな」

そう言いながらおとうさんは、たか君しのひざから血がしたたり落ちていることに気づきました。

「どうした、そのけがは？」

「逃げる時に岩にぶつかった。すごく痛い」

傷がけっこう深いことがわかったおとうさんは青くなりました。

やっと帰り着いたふたりでしたが、けがを見たおかあさんから、もうがまんならないとばかりに思いつき怒られてしまいました。

「まったく何してるんですか！　すぐにたかしを夜間診療所に連れて行って。そしてもう二度とこんなことはしないで！」

「・・・わかった」

「あの熱帯魚も今すぐ捨ててきて」

「・・・わかった。でもまずはたかしからだ。後で話そう。」

おとうさんは病院へと車を走らせました。

傷口を三針縫われて、包帯を巻かれたたかし君が診療所から出てきました。おとうさんが、大丈夫

かと声をかけました。

「麻酔注射が痛かった」

と言った後、

「大きな熱帯魚を飼いたいなんて言ってごめんなさい」

たかし君はそう続けました。

「おとうさん、もうこんなことしたくない。おかあさんにも心配させたくない」

「大きな熱帯魚は我が家には無理だったんだ。アロワナがあんなにどんどん大きくなるとは知らなかった。水そうを買うお金も続かない」

おとうさんの言葉に、たかし君がごめんなさいと言うと、

「あやまらなくていい。おとうさんだって大きな熱帯魚を飼ってみたくてわくわくしたんだから」と笑いました。

次の日、おとうさんが買ってきた熱帯魚ショップに連絡を入れて引き取りをお願いしました。そしてその日の夜、捕まえてきたカエルたちをおとうさんはひとりで宝満山に返しに車で向かいました。たかし君は、「守る会の人と会わないで返せますように」

祈る気持ちでおとうさんの車を見送りました。半月の空にゴイサギが跳ぶ影を浮かばせて、クワツと鳴きました。

令和五年十二月十九日

文章・まえだ つとむ（前田 勉）

昭和三十七年 鹿児島県生まれ、以後、山口、宮崎、福岡と移り、現在鹿児島県在住

これまでの作品

「空っぽのプレゼント」、「クレーンの先には」

「小さなクモが太平洋を渡る」（鹿児島市 子どもたちに聞かせたい創作童話 入選）

「忘れ物グラフ」（アンデルセン童話 入選）

自主出版

詩集「真夜中のつぶやき」、小説「気配」